

不登校事例にみられる不安の特性について

—対象関係論からの接近—

植木田 潤
(教育相談部)

I はじめに

メラニー・クライン (M.Klein) は、精神分析治療の臨床実践を通して、心の発達の過程には2つの質の違う段階が存在することを発見し理論化した (Klein, 1983 ; Segal, 1977)。すなわち、対象 object を良いもの good object と悪いもの bad object に二分化 (分裂) することで自己と対象の関係を安定させる段階『妄想—分裂ポジション Paranoid-Schizoid Position』(略してP-S Position) と、二分化した対象が一つに統合されていく段階『Depressive Position』(略してD Position) の2つである。そして、この二つの段階は一度確立すれば元には戻らないような単一直線的な発達ではなく、人生のさまざまな局面において交互に現れ、行きつ戻りつするものであるという意味を込めて Position という言葉を用いた。二つの Position には、それぞれ特徴的な防衛機制 defense mechanism が作動しており、臨床的には、この防衛機制の作動している様相を手がかりにして、2つの Position の達成具合を推測することが治療の焦点を定める上で重要になっている。これら、対象と自己との在り方、関係性に注目した精神分析的な臨床理論を総称して「対象関係論 Object-Relations Theory」と呼んでいる。対象関係論は、心の発達や症状形成に関して、それまでのフロイト (S. Freud) を基礎とした精神分析の中心理論とは異なる視点を示唆していた。それは、従来のフロイトの理論において、精神分析が個の中の力動の在り方に注目した一者心理学であったものから、対象関係論によって、対象と自己との関わりに注目した二者心理学の枠組みで理解することを可能としたのである (Alvarez, 2002, p 11)。

筆者は、複数の不登校事例のカウンセリングを通して、小学校年齢で不登校になる子どももいれば、中学校年齢で不登校になる子どももいるのはなぜなのかと疑問を感じてきた。小学校の時期と中学校の時期で生ずる不登校では何が違っているのだろうか。臨床的には、例えば、児童・生徒の外界の捉え方や体験の仕方、訴える不安、他者との対人関係の持ち方などに質的な違いが生じていると感じられる。これは、思春期の発達課題に関連した、子どもの心性の質的な違いであることは理解されるが、カウンセリング

の過程でどのような違いに注目するのが重要なのだろうか。筆者は心理治療において、子どもの心の発達を促進する視点が重要で、その焦点としては治療者との関係性が重要な役割を果たすことを論じてきた (植木田, 2005)。こうした観点から、思春期という心的な自立に重要な時期を巡って生ずる質的な発達の差異を対象関係論の立場から俯瞰することで、より深く不登校事例を理解することができるのではないかと考えている。そこで本論では、教育相談という枠組みの中で筆者が出会った複数の不登校事例を、対象関係論の視点から整理し明確化することを試み、不登校事例の理解の枠組みとそのような子どもへのより良い対応の在り方にいくらかでも供することを目的とする。

II 不登校の背景となる要因

不登校は病気や障害ではなく、状態像である。不登校に至る経緯はさまざま、個別性が高く多様である。「○○だから不登校」といった因果論的な捉え方をすることは難しく、多くの場合、複合的な要因を含んでいる。経過も長期にわたる事例が多いため、状態像や対応方法を一般化していくことには困難がともなう。そういった意味で定型的な対応は考えにくいのが現状である。

しかし、不登校の原因が多様ではあるとはいえ、対応を考える上では、その状態像を含めた何らかの見立て (= アセスメント) が当然必要となってくる。齊藤 (2006) は、「不登校の多軸診断システム」を考え、不登校理解の枠組みとして5つの軸に沿って整理し明確化する方策を提示している。その第1軸は「背景疾患の診断」であり、第2軸は「発達障害の診断」、第3軸は「不登校出現様式による下位分類の評価」、第4軸は「不登校の経過に関する評価」、第5軸は「環境の評価」となっている。この中で、第3軸と第4軸には下位分類が示されている。第3軸には、プライドが高く弱音を吐かず強がる姿勢が挫折して出現する<過剰適応型不登校>、萎縮し不安に満ちた性格傾向を有する<受動型不登校>、過剰な干渉に対して努力を放棄する形で不満や怒りを表出している<受動攻撃型不登校>、発達障害などの体質的な衝動性の高さや強度の見捨てられ不安などで対人関係場面での衝動統制が難しい<衝

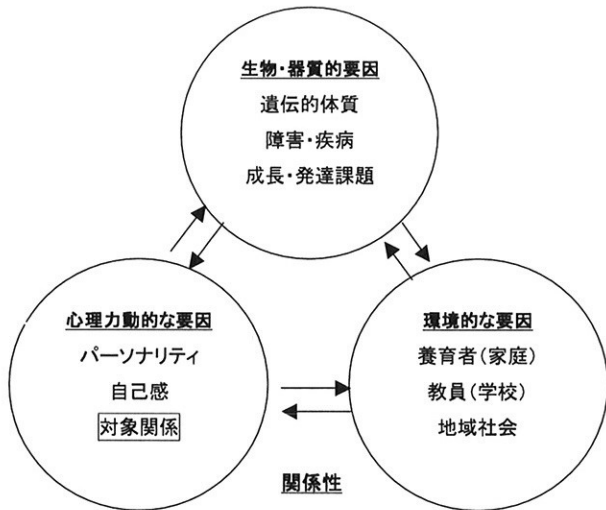


図1 相互作用

動統制未熟型不登校>、いずれにも分類できない<混合型(あるいは未分化型)>といった5つの下位分類が示されている。また、第4軸には、<不登校準備段階><不登校開始段階><ひきこもり段階>を想定して、『どの段階にあるかによって周囲の関わり方を変えていく工夫が必要である』(齊藤, 2006, p 22) ことを述べている。この多軸診断システムの視点は、精神医学的な観点に止まらず、多種多様な背景をもつ不登校事例を、多くの対応の場や多職種にわたる専門性に囚われずに客観的な枠組みを持って共通理解することを可能とし、個別の対応場面や他職種間あるいは教員間等の連携の場においても大変有効に活用できることが期待される。このように、不登校状態をいくつかの階層に分けて類型化していくことで、系統的な対応策を練る方向へとつなげていくことが可能となる。

上記の「多軸診断システム」の視点から見出される不登校の状態像は、子どもの表している現状を客観的に把握する方法として優れた視点である。しかし、この第1軸から第5軸で評価される各状態像の、何がどのように相互作用して不登校状態を作り出しているか、その関係性は明確でないように思われる。また、特に心理療法的アプローチに限って言えば、第3軸「不登校出現様式における下位分類の評価」および第4軸「不登校の経過に関する評価」で把握される状態像が形成されるプロセスを明確化して理解することは、治療的アプローチの力点を見定める上で重要である。

これらの視点を踏まえた上で、筆者なりに心理療法的な関係性の観点から不登校事例を図式化することを試みたものが図1である。第1軸「背景疾患の診断」、第2軸「発達障害の診断」は不登校にある児童・生徒本人の持つ“生物・器質的要因”とみなし、第5軸「環境の評価」については、本人を取り巻く“環境的要因”とみなすことができ

るだろう。これら2つの要因と、第3軸および第4軸の評価像を作り出す、パーソナリティや自己感、対象関係といった“心理力動的psycho-dynamicな要因”とが相互に作用した結果として、不登校という状態像が形成されると考えられる。特に治療的アプローチの観点からは、この3つの要因の相互作用の中でも、発達上、後から形成される、つまり生物・器質的要因と環境的要因がある程度規定された中で形成されていく“心理力動的な要因”の作動の仕方が重要な鍵となっていると筆者は考える。

事例1

小学校4年生の女兒は、妹ができたことと転校の時期が重なった、ちょうどその頃に不登校状態に陥った。本児が語ったところによれば「転校前の学校では給食を残しても何も言われなかったけど、新しい学校で給食を残してはいけないことを知らずに残してしまって厳しく叱られた」ことが不登校の直接のキッカケになった。その後、給食以外の教室場面での「担任の表情や態度も怖い」ものと感じられるようになり、やがては教室や学校という場そのものが怖くなり、ついには家の外に出ることも怖くなってしまった。本児の様子をひどく心配した保護者が学校側と話し合いを重ねていき、給食に対する担任の指導方針は変わり、担任自身の厳しい指導態度も「先生はもう怖くなくなった」と本児自身が認めるほどに変化したのであったが、結局、それでも登校することはなかなか困難であった。カウンセリングの過程で、本児は「なぜかは分からないけど、家の外に出ると怖い」「お母さんがいないと怖くなってくる」と言っており、外出時も母親が常に一緒にいなければならない状態になった。当初、保護者はそうした本児の状態を「どこまで許していいのかわからない」「わがままなのではないか」と語り、「もっと強くなってほしい」と本児の性格的な問題として心配していた。

カウンセリングの過程で、本児は担任がいかに自分にとって怖い存在であるかを語るのと併行して、妹に対する嫉妬や羨望の気持ち、そして母親に対する怖さをも意識し始めることができるようになった。すると、本児は徐々に母親に対する不満や怒りを表出し始めて、そうした不満とともに、学校に行けない自分自身にも疑問や苛立ちを感じ始めた。母親からの期待の重さを見捨てられてしまうような不安、自分自身の依存の欲求や周囲に対する願望、万能感の拡大などとの狭間で揺れ動いた。筆者は、本児が担任を怖いと感じていたことが、実は母親への怖さが置き換えられたものであり、さらには、本児自身の怒りを母親からの怖さに置き換えていることを本児と共有するように治療的に働きかけていった。こうした本児自身の内的な世界と母親や担任との心理力動的な関係が意識化され始めると、本

児の「怖い」という感覚や不安感が低減していき、まもなく保健室登校を足掛かりにして教室への復帰を果たした。

事例 2

小学校3年生の男児は「担任の先生が嫌い。ボクに意地悪でイヤなこと、苦手なことをさせるから」「担任がいなければ行ける」と語り、実際に担任の指導しない専科の授業に関しては教室で授業を受けていたが、その際にも「教室に行くと、なぜか分からないけど、頭が真っ白になる」という緊張状態や不安感があることも語った。保護者は本児の不登校について、「性格的に好き嫌いが極端にハッキリしていて、一度嫌いになると絶対にダメ」になってしまう性格であることが不登校と関係しているのではないかと心配していた。

事例 3

小学校3年生から登校渋りを示していた4年生の女児は、元々、家族に対しても同級生たちに対しても寡黙であった。やがて学年が変わると不登校になり、当初は頭痛と吐き気等の身体症状を強く訴えていたが、保護者が単なる身体症状ではなく、不登校状態が本児の言葉にならないサインであることを認め、ある程度の欠席を認めるようになると「なんだか分からないけど、緊張する」と語れるようになり、母親と登校を試みた際には近付いてくる校門を見て「(学校が)怖い」と母親の手を強く握りしめていたことが語られた。また、本児は同時に、あるいは同世代の子ども集団に対して、非常に消極的で自信が無く、半ば緘黙様の状態にあったことが保護者からの心配として語られていた。以前には家族の団欒でさえも交わることに消極的であったことが分かったが、カウンセリングの過程で、家族や兄弟に言葉を返すような自信を見せ始めるようになっていった。

事例 4

小学校4年生の途中から不登校になった男児は、嘔吐などの身体症状を強く示し、本児自身も「ボクは身体が悪いから学校に行けないんだ」と語り、その原因を身体の問題であると主張していた。カウンセリングの場面では、箱庭の砂が手の平にべったりと付くほどの汗をかいており、極度の緊張感が示されていた。暗い廊下や夕刻の闇を怖がり、また面接室内外の物音に異常なほど敏感で、ちょっとした音に対しても動きを止めて「今の何?」と不安げに確認した。暗闇や音に対する過敏さは生活全般に渡っており、保護者は本児を心身共にとても弱くて脆い存在であると感じており、日常生活においても腫れ物に触るように対応していた。

いずれの事例においても、子ども自身の訴える不登校の理由は一見すると明確である。事例1と2では担任の問題であり、事例3と4では身体的な病気が原因となっているのである。これらは子どもの主観的な体験からすれば、登校を躊躇うに足る正当な理由であり、いわば「悪いのは担任(あるいは病気)」なのである。しかし、子ども自身から保護者や担任へと立場を変えてみれば、これは先述の“環境的な要因”だけの問題であると単純には考えられない。なぜなら、一時的には保護者や学校関係者も不登校の原因をそうした理由に求めたとしても、そうした原因が取り除かれた後でも、子どもの不登校は改善されない事例が数多いことを経験的に知っているからである。いじめの問題に学級や学校で取り組んだり、転校を試みたりすることで不登校が改善された事例が存在することも確かだが、不登校状態が改善されなかった事例も同様に数多い。

そこで、図1の相互作用という観点に立ち戻ってみると、“環境要因”だけでなく“心理力動的な要因”へ視点を移すことで重要な意味が生じてくる。事実、事例1から4にみられるように、保護者は子ども自身の内面にも何らかの課題が生じていることを認めている場合が多いのである。この内面的な課題に共通している中心的テーマは、子どもの訴える不安と密接に関連した問題であるように推測される。それは、その不安の背景にあると推測される子どもの主観的な体験と客観的現実との乖離—ギャップの問題でもあるように推測される。事例1においても、本児自身の訴えていた「担任が怖い」という不安は、カウンセリングが進むにつれて、本児自身の他者の捉え方の歪みという内面的な課題と密接に関連していることが理解された。事例2では、「頭が真っ白になる」緊張感と、「好き嫌いがハッキリしていて、ダメになると絶対ダメ」という内面的な課題とが関連しているようである。事例3においては、「何だか分からないけど緊張する」ことと、不登校の原因となっている身体症状や緘黙様の状態を引き起こしている自信のなさが関連しているようである。事例4では、身体症状と暗闇や音にみられる不安感とが密接に関連していることが推測される。

これらの子どもの訴えに共通している不安感と子ども達が周囲の世界を主観的に捉えている体験との関係性を理解するためには、精神分析理論の中でもKlein学派の用いる「対象関係 object relations」という概念がたいへん有効であると思われる。

Ⅲ 対象関係とは

メラニー・クラインは精神分析治療において、患者の内的対象と患者自身との関係の持ち方に注目した(Klein,

1983 ; Segal, 1977 ; 松木, 1996)。この関係の持ち方が「対象関係」であり、治療的な観点から、その対象関係に注目するのが「対象関係論」の視点である。内的対象とは、空想または想像された人物あるいは人物の一側面のことであり、いわば、ある人の中の特定人物の表象イメージである。例えば、ある人が「お母さん」と言った場合に、他者の見た客観的な母親像とある人にとっての母親像とは同一人物であってもギャップが存在する。ある人にとっての母親像は、それがどのような人物だとその人に体験されているかということが重要であって、他者が見た場合とのギャップの大きさ（つまりイメージの歪みの大きさ）と、そのギャップを埋めるために作動している防衛機制の特色を描き出すことが、対象関係論の枠組みからその人の内的世界を理解する上では重要視される。また防衛機制の中でも、特に「投影同一化 projective identification」の働きを重視したことは、対象関係論的視点に特徴的である。投影同一化とは、患者自身の中であって処理しきれない情緒（あるいはその一部）を他者の中に排泄して（投影）、それが自己の情緒の一部であるにも関わらず他者のものであると感じること（同一化）で、自己の安定を図る防衛機制のことである。例として、対象関係と投影同一化の作動している様子を事例1に当てはめてみれば、本児が「怖い」と感じてい

た情緒は、実際には本児の無意識に存在していた担任や母親に対する怒りであって、転校生である本児を大切に扱わない担任と自分よりも妹を可愛がる母親への怒りや不満など、本児の処理しきれない情緒が混乱して表出されていた結果であることが理解できるようになる。この際、発達の・時系列的には本来母親に向けられていた怒りではあるのだが、母親に対して怒りを向けることはその報復として、本児に「母親から見捨てられる不安」を喚起することとなり、母親との良い関係を守るためには、担任との悪い関係を維持してそこに怒りの情緒を全て振り向ける（分裂 splitting）ことでバランスを保っていたことが推測される。このように、本児が「自分は大切に扱われていない」と体験を意味付けていく過程とそこから生じている不安には、本児自身の対象関係の在り方が深く関連していることが理解される。そして「怖い」という不安が、怒りの情緒から母親と自己を防衛した結果として生ずるものであることも理解される。換言すれば、この前面に浮かび上がっている不安の性質から、その底流に横たわっている対象関係の在り方を予測できる可能性があるということである。

先述のメラニー・クラインは、発達の観点から、対象関係と不安の在り方を関連づけて理論化している（図2）。対象関係論的発達を概観してみると、乳児は誕生直後には

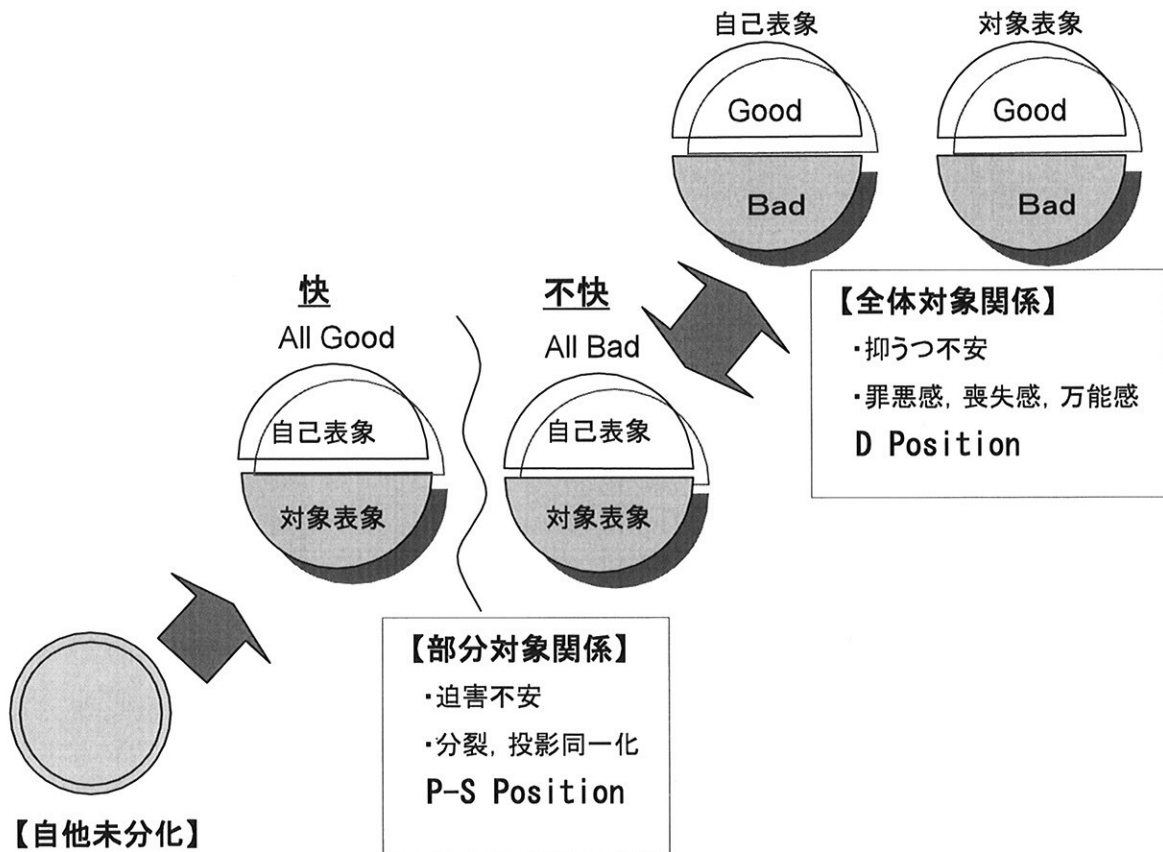


図2 発達のみた対象関係と不安

自己や他者という意識の未だ存在しない、自他未分化な情緒状態にあることが推測される。この未分化な状態から、やがて快と不快の2つの情緒状態へと分化(分裂split)してくる。この時点での他者との関係の持ち方は、快な状態にとどまることを追求し、不快なものは徹底的に排除するという<部分対象関係>に特徴づけられる。例えば、乳児は授乳や抱っこ、快適なオムツなどの快な体験をもたらす母親と、空腹や一人寝、湿ったオムツなどの不快な経験をもたらす母親とが同一人物であると認識することが困難で、それぞれにgoodな母親対象とbadな母親対象が存在するかのようには体験すると仮定される。このように対象を部分に分けて体験することから、この時期の対象関係の在り方を<部分対象関係>と呼んでいる。そして部分対象関係で活発な防衛機制の特徴は投影同一化である。つまり、このgoodな母親対象を守るために、積極的に不快な面はbadな母親対象に排出(=投影同一化)されることになる(例えば、授乳が遅れることはgoodな母親対象ではなくbadな母親対象のせいとされる)。しかし、その報復としてbadな母親対象から迫害されるのではないかという空想を生むことにもなる。これがこの時期に特徴的に見られる「迫害不安」である。

さらに、発達が進むと、goodな母親対象とbadな母親対象が同一人物であることが認められ受け容れられるようになり、今まで二分化して排出しようとしてきた(特にbadな)母親対象に対して罪悪感や喪失感を特徴とした「抑うつ不安」を生ずるようになる。換言すれば、母親対象が必ずしも快のみをもたらさないことを認め、受け容れ、そうした完全でない母親対象に耐えられる自我が育つということである。goodな母親対象とbadな母親対象が一つの対象に統合されることが特徴であるため、この時期の対象関係の在り方を<全体対象関係>と呼んでいる。この時期には、対象だけでなく自己についても一つの対象に統合されて自他の心的な境界が明確に分化されることが重要である。また、対象や自己の統合を脅かすほどに、これらの罪悪感や喪失感を特徴とした抑うつ不安が強すぎる場合には、躁防衛 manic defenseの中で否認や万能的空想等が生ずることが想定されている。クラインはこれらの発達上の特徴的な二段階を明確にし、対象を二分化することで自己と対象の関係を安定化する段階を『妄想一分裂ポジション Paranoid-Schizoid Position』と呼び、二分化した対象が統合されていく段階を『Depressive Position』と呼んだ。そして、この二つのポジションは単一的直線的な発達ではなく、人生のさまざまな局面において交互に現れ、行きつ戻りつするものであり、質的に異なる発達段階であることを理論化した。タスティン(F. Tusin)は自閉症児の精神分析的な治療を通して、メラニー・クラインの2つの

Positionに先行する、もっと原始的なPositionが存在することを示唆している(Tustin, 2005; Spensley, 2003)。

メラニー・クラインの理論から見た場合、事例1と事例2にみられる「担任の怖さ」や「担任への怒り」は、自己の内にある処理しきれない情緒を他者に投影することから生じる「迫害不安」と同質のものであることが推測される。そして、事例3と事例4にみられる明確な対象を持たない漠とした不安感も、おそらく投影同一化を基盤とした迫害不安が生じるような、何らかの対象関係の歪み、あるいは未成熟な面があるのではないかという推測が導き出される。迫害不安を手掛かりに推測するのであれば、そこには投影同一化の作動を通して、子どもの側に何かしらの攻撃的な情緒が潜在していることが仮定される。例えば事例4で、純粹に音や暗闇だけを切り取ってみれば、それは不安とは直接に結びつくものではないはずである。その音や暗闇に「怖い」という性格を意味づけ(つまり投影)しているのは、子ども自身である。音や暗闇がどこから生じていて何をもたらすのかは予測不可能でコントロール不可能であるという意味で、共通した性質を帯びている。この予測不可能性や対処不可能な事態に対する怒りや不満が、予測不可能な対象や対処不可能な対象との関係の置き換えであることが理解されれば、かなり対象関係の様相を明確にできるだろう。実は、事例3と事例4のどちらにおいても、現実の母親の不安がとても強くて、ひどく叱ってみたり宥めてみたり、厳しくしたり甘やかしてみたりと、子どもに対して一貫した態度で接することが困難になっていたのである。(母親自身の不安も子どもに対する怒りの裏返しであると仮定すれば、母子のどちらかが悪いという性質の問題ではなく、図1に示したような相互作用が悪循環に陥っていると考えるのが適切である。)こうした現実の母親との関係は、事例1にも共通していたことである。事例2においては、そうした母親の不安定さは母子間では示されなかったが、母親のエピソードからカウンセリング以外の場で活発に怒りや不満を表出している面は語られていた。

これら事例1から4に共通する問題としては、迫害不安に特徴づけられるような対象関係と、現実不安定な母子関係との相互作用のあることが理解された。換言すれば、迫害不安の存在は、心の発達が部分対象関係(P-S Position)のレベルであることを示しており、対象関係がその未成熟なレベルにあることは、現実の不安定な母子関係から多大な影響を受けていることが示唆されているのである。つまり、母子関係の安定度が対象関係のレベルを左右する可能性があるということになろう。(注:本論で「母子関係」と言っているのは、必ずしも生母との関係を指すのではなく、主たる母性的養育を与える人物との関係のことを述べている。)

IV 分離不安と対象関係の形成

ここで、対象関係のレベルを左右する母子関係の安定度という点について整理してみたい。

J. ボウルビー (J. Bowlby) は、比較行動学で蓄積された知見を交えつつ、乳幼児の健全な発達にとっては母子間の愛着関係がたいへん重要であり、分離体験の及ぼす影響が深刻であること等について実証的に研究した (Bowlby, 1976 / 1977)。そして、愛着対象の喪失が精神病理学的な反応を引き起こす可能性を示唆した。J. ボウルビーは、当時母子関係の起源に関して有力であった、二次的動因説 (乳幼児が母親に愛着を示すのは母親が乳幼児の生理的要求を満たしてくれることを学習するためであるという説) を修正し、乳幼児には保護者から母性的な養育を引き出すような愛着行動が発現されるようなシステムが生得的に備わっており、母子間のつながりを密接にするように維持していることを見出した。また、生理的要求が満たされないことが乳幼児を不安にするのではなく、「母親の不在そのものが危険と感ぜられる」ことを示し、母親の不在に対しては、母親の接近を促すような愛着行動が増すことを示した。そしてさらに、愛着行動によって愛着対象＝母親から引き出しているものは、単なる生理的要求の充足ではなく、乳幼児の苦悩や恐怖を低減するために不可欠な安心感や安全感であることを強調した。こうした愛着対象＝母親に容易に接近できない状態で生じる不安を「分離不安」と呼び、強度の分離体験は生涯に渡って影響を及ぼすことを示唆し、『子どもや成人が安定、不安定、苦悩、のいずれの状態におかれるかは、おもに彼の主要愛着人物に対する接近度および主要愛着人物の反応度によって決定されるのである』(Bowlby, 1977, p. 25) と述べている。

つまり、乳幼児の生涯に渡る健全な発達にとっては、母親から生理的・物理的な世話を得ることだけでなく、心理的・情緒的な安心感や安全感を得ることが重要な意味を持っており、なおかつその安心感や安心感は母親の反応如何に懸かっていると示唆したのである。母親の側が子どもの愛着行動に適切に反応していくことで、子どもの側には愛着対象が摂り入れられて、やがて対象の恒常性が確立する。つまり、母親が目前にいなくとも、子どもの心の中に母親対象が存在するようになり、多少の不安な事態に対抗できるだけの心的な強さが生まれてくるのである。

この母子間に生まれた安心感・安全感が十分に子どもに体験されて、たとえ母親が目前にいなくとも不安を喚起せずに済む程度まで母親対象が内在化されているかどうかは母子関係の安定度を左右すると推測される。そして、ひいては対象関係のレベルに大きな影響力を与えていると考えられるのである。発達上、対象関係が現実の相互作用を

摂り入れた結果として形成されたものであることから考えれば、もしも母子関係が不安定であるならば、対象関係も不安定なものとなり、より未熟なレベルを維持した状態にとどまるだろうことが推測される。

こうした観点から、筆者の不登校の事例1から事例4に見られるような「何だか分からないけど、母親と離れられない」「家から出られない」不安感は、母親＝愛着対象との分離に対する不安感を表現していることが推測される。そして、こうした不安感が母親との実際の相互作用に基づいていることが示唆される。さらに、この分離不安を対象関係の観点から俯瞰してみると、子どもが迫害不安の背景にある怒りや不満を向ける母親との母子関係が不安定であると、そうした怒りや不満を向けることは母親対象からの深刻な分離不安や喪失感を喚起することになり、見捨てられ不安が生じやすくなる。この不安が強ければ、それを避けるために母親対象を守ることが必要となってくる。つまり、goodな対象 (=母親対象) とbadな対象 (=例えば、担任) との分化 (splitting) を強化して、badな対象へと怒りや不満をより強く向けなければならなくなる。そして、その結果として報復の不安、つまり迫害不安は一層強くなるという悪循環に陥るのである。

ここで明確にしておきたいことは二点である。一つ目は、対象関係が安心感を保証するものか不安感を喚起するものかに関係なく、現実の母子間の相互作用の経験が摂り入れられて、内在化することで形成されるということである。二つ目は、そうして内在化し形成された対象関係ではあるが、小学生の不登校事例で見られる限り、未だ現実の母子間の相互作用と密接に繋がっていることである。

V 心的な自立を中心にした思春期の対象関係

小学生の事例と比較して、中学生の不登校事例に見られる不安と対象関係には、どのような違いや特徴が見られるのだろうか。

中学校年齢といえば、発達上重要な節目の時期である。それは思春期として一般に知られているところであるが、思春期の中心的な発達課題としては心的な自立の始まりが挙げられるだろう。それゆえ、この時期になって再び分離不安が喚起されやすくなっていることは十分に考えられる。そうなると、やはり中学生の不登校事例においても、小学生の不登校事例と同様に、迫害不安とPS Positionを基礎とした対象関係が活性化して、分離不安を刺激しているのだろうか。実際に筆者の事例に当たって考えてみたい。

事例5

中学2年生の男子生徒は、級友からのいじめを機に不登

校になった。数ヶ月間の適応指導教室での対応を経て自信を取り戻したが、心機一転を図って転校したつもりが、転校先でもやはり不登校になってしまった。それでも保健室登校という形で何とか学校との関係は断たないよう必死の努力を続けていた。その最中に学校からの紹介で、筆者の担当するカウンセリングへとつながった。カウンセリング場面で語られたことは、「今さら教室に行っても意味がない」「何の意味があるのか分からないから行くことが躊躇われる」などと、当初は教室に行くことを否定的に意味付け、「行けないのではなく行かないのだ」とでも言いたい様子を示した。しかし、カウンセリングが進むにつれて、「行こう行こうと思っているが、行けるという確信が持てない」「教室に行こうとすると、身体が固まって動かなくなってしまう」と現実に葛藤が存在することを認めるようになり、さらには「教室に行くとは何が起こるか分からない」「何か酷いことを言われるのではないか」と不安を意識して語ることで可能となった。また、カウンセリングを通して理解されたことは、本児が学習という面では優秀な成績を取めながらも「自分は他者よりも劣っている」と感じていて、教室に行けない自分に対する情けなさを語り、「色々な心配を先回りして考えてしまうから動けなくしてしまっている」ことに気が付いた。結局は「勝手な想像をして、周囲を怖いものだと決めつけていたのは自分自身で、相手はそうでもないのかも知れない。自分の気持ち次第で周囲の見え方は変わる」ことを意識できたところで、教室に行くことができたのである。

事例6

同じく中学校2年生の男子生徒は、頭痛や腹痛等の身体症状を訴えて登校を渋り始めたところでカウンセリングを始めることになった。その際、知能検査を実施して、本児に境界線級の遅れの認められることがカウンセリングの中で保護者と本児に伝えられた。保護者が本児の登校できない苦痛感や心情を理解し始めると、身体症状が消失する代わりに、欠席の日数は増えていった。本児は「勉強が分からないから嫌い」「学校に行っても意味がない」「無駄な時間をイヤなことに使うよりも他のことに使いたい」「(学校へ行くのが) 何だか面倒くさい」と語っていた。カウンセリング開始の当初は、家で過ごしていてもTVゲームをしたり漫画を読んだりしている時間の方が多かったが、カウンセリングを積み重ねて、本児自身の自己理解を進めていくと、それまで電車の切符さえ自分一人で買ったことのない本児が、自分の買い物のためやカウンセリングのために遠方へ一人で出かけるようになり、その行動範囲を徐々に拡げていった。やがて本児が「不登校の原因じゃないかと思ひ当たった」と語ったことは、小学校入学の際に、

それまでいつも一緒に過ごしていた幼なじみ達と一人だけ違うクラスになってしまい、「どのように学校生活を過ごせばいいのかわからなくなってしまった」ことの回想であった。そして、そうしている内に「学校では『喋らない』『クールな』キャラを作ることが身に付いて」しまい、ますます周囲に溶け込むことが難しくなり、また級友や先生など周囲の人たちも自分の作った方のキャラクターを本児として認めるようになり、「なんか苦しくなった」「なんか疲れた」ことを語った。そうした現在の自分の閉塞感を理解したのと同じ頃に、本児はゲームの世界から抜け出し、読書や映画などに興味が広がり、より現実にも目を向けるようになった。高校への進学が決まり、「自分の作ったキャラを知らない新しい仲間たち」との出会いを楽しみにしていることを語った。

事例7

小学校の低学年から集団への適応に困難があり、中学年でなんとなく周囲の子と違う自分を意識し始めて医療機関を受診したところ、発達障害の診断を受けた。これを機に保護者の了解を得て不登校状態になった中学校3年生の男子生徒は、カウンセリングの開始当初、緘黙であった。カウンセリングの過程は、本児が緘黙であったこともあり母子同室で、母親を通訳のようにしてコミュニケーションを続けていた。やがて、本児はカウンセリングの中では緘黙であることを止め、家に引きこもりがちだった状態から外出も一人で積極的に行うようになった。しかし、本児の行動範囲が広がり、カウンセリングで自分自身の内面と向き合うことが増えるのと同時期に、「心配症」と自身で呼ぶような強迫観念と強迫症状に悩まされるようになった。やがて、その症状の背景には、「他者よりも劣っている(と感じている)自分を否定したい」気持ちが強く在ることが理解され、「できることなら手術でも何でもいいから障害を無くして、普通の人間になりたい」という切実な思いを訴えた。

これらの事例5から事例7までの不登校事例に共通して見られるのは、事例1から事例4の小学生事例に見られたような、外的な対象に向けられた明確な迫害不安が存在しないことであり、表面的には不安定な母子関係の存在も示されないことである。その代わりに、自己を中心に据えた対象関係が前面に意識され始めており、また万能感に支配された対象関係を維持するために現実的な対人関係から引きこもっているようにも見られる。換言すれば、外界との現実的な接触を断つことで、万能的な対象関係を内界に維持するように自己を守っていることが推測されよう。事例5と事例6では特に顕著であるが、まるで「行かない」と

いう自分の意思で行動を起こしているかのようなのであるが、その背後では、学校に行けない自分がいることは否認 denial されている。また、母親のことは意識して語られることはないのだが、現実的には外界との接触が必要な場面では、そのほとんどを母親に依存している（これは思春期の特徴とも言えるが、不登校事例では特に母親に対する依存度が大きいことが特徴である）。同世代の交友関係においても、特定の誰かが語られることは少なく孤立しているように見える。つまり、子どもの語る自己像や他者像＝対象関係と、現実の対人関係の間には大きなギャップが存在している場合が多いのである。

対象と自己との関係性について、D. スターン (D. N. Stern) は、実証的かつ臨床的な乳幼児研究を重ねて、乳幼児の自己感が形成されていく過程と精神病的に形成されてしまった自己感と対象関係に対する治療アプローチを明らかにしている (Stern, 1989 / 1991 / 2000)。D. スターンは、現実の母親との相互作用の記憶の蓄積が母親表象 representation と自己表象を乳児の中に形成していく過程を理論化し、「親-乳幼児心理療法」を用いて臨床的にその有効性を示した。母親は乳幼児の身振り手振り、表情などのあらゆる行動に意味付けを行い、その意味付けされた体験が、母親と乳幼児の現実の相互作用を通して乳幼児の中に摂り入れられていく過程を明らかにした。やがて、体験を意味付ける機能は、乳幼児の中に自己感として育っていき、乳幼児はこの自己感に基づいて、さまざまな体験を意味付けていくようになるのである。この自己感形成に重要な役割を果たす母親の行動が「情動調律 affect attunement」であることを実証的に示し、乳児の情緒的なサインに対する母親の応答の仕方如何によっては、乳幼児の自己感が臨床的に病理性を帯びた歪んだものとなる可能性を示唆した。

筆者の事例を見ても、直接的に不安定な母親との対象関係が語られる機会は少ないが、母親との相互作用を通じて形成されたと推測される自己像が、万能的であったり実像とのギャップを示したりしているということは、現在までの発達過程の中で自己と母親に関する歪んだ対象関係を形成し維持していることを推測させる。つまり、すでに摂り入れられた母親対象＝愛着対象が、現実の母親との関係から独立して、子どもの内界に根付いて機能していることを示していると理解される。換言すれば、過去の母親像が時間を止めたまま心の内にあって、さまざまな影響を子どもに及ぼしているのである。この点が小学生の不登校事例とは違っている（事例7は、実際の母親に対する依存が大きい、これは発達障害の点で中学校と小学校の過渡期の心性を示すものであることが推測される）。

中学校年齢の不登校事例に見られる分離不安とは、この

過去に歪んで摂り入れられてしまった母親対象からの分離を巡る不安であると考えられる。思春期に至るまでの対象関係が不安定で脆いものであったとすれば、思春期に入ってから、ちょうど子どもの心的な自立への願望が高まっている時期に、対象が崩れ去ってしまうことに対する不安感や喪失感が強く喚起されてしまう。すると、ガラス細工の対象を破壊してしまわないように自己を縛り、身動きが取れない状態にしてしまい、結果、「行きたいけれど、行けない」という葛藤が不登校という形で象徴的に表現されることになる。過去の母親対象に縛られた自己を捨て、「こうありたい」と願う理想の自己像に向かう心的自立との狭間で苦しんでいることが推測される。

実際にカウンセリング場面で子どもの内面を掘り下げていくと、そこには、自信のなさや自己否定感を裏返しにした自己中心的で万能的な対象配置が存在している。「学校も友達も意味がない」と語るものの、実際にはうまく人間関係を保っていく自信がない。これを対象関係論の視点から俯瞰すれば、もはや良いもの good と悪いもの bad に二分化された対象配置は影を潜めつつあり、喪失感や罪悪感を基調とした「抑うつ不安」を避けるために、否認や万能感を特徴とした躁的防衛 manic defense が作動していることを示しており、D Position の対象関係が布置されていることを暗示している。つまり、この万能的な自己像を放棄して、さらなる発達を遂げるのか、あるいは自立心を放棄して D Position の発達にとどまるのかを表現した葛藤であるとも言えるのではないだろうか。

換言すれば、思春期的な自立心が高まるほどに、現実には見合わなくなってしまった愛着対象と自己像を捨てざるを得ない段階になるが、あくまでも愛着対象と万能的な自己像を守ることに固執すると、自立心を放棄しなければならなくなる。これが中学生不登校事例の葛藤状況であると推測される。

ここで明確にしておきたいことは2点あり、一つ目は、中学校の不登校事例では現実の母子関係に基礎を置きつつも、すでに子どもの内界に摂り入れられて独立に機能している母親対象＝愛着対象と自己像との関係性に子どもが支配されていることである。二つ目は、心的な自立心が強くなるほどに、そうした母親対象と万能的な自己像を失う抑うつ不安が前面に出てきて、躁的防衛 manic defense が活性化するということである。

VI おわりに —治療アプローチの展望—

以上みてきたように、対象関係論の視点から俯瞰した場合に、小学生の不登校事例と中学生の不登校事例には、それぞれ特徴的な心性の作動していることが示唆された。小

学生の事例においては、迫害不安とPS Positionの対象関係が潜在している可能性を示唆し、中学生の事例においては、抑うつ不安とD Positionの対象関係が潜在している可能性を示唆した。もちろん、これは子どもの心の発達程度に応じて、PS PositionとD Positionの様相が混じり合った中間的な段階が存在する可能性も含まれている。(この移行の時期を巡る対象関係も重要なテーマを含んでいる。D. ウィニコット (D. W. Winnicott, 1977) を参照されたい。)

こうした小学生と中学生の不登校事例に潜在している不安と対象関係の特徴的な心性を理解した上で、さらに治療的に枠組みを考えることも本論の重要なテーマである。

小学生の事例の特徴から考えられる治療的アプローチの焦点としては、現在進行形の母子関係から形成されている不安定な愛着関係の意味づけを修正していき、goodな母親対象の恒常性を確立することで、子どもの分離不安や迫害不安を低減させていくことが重要であろう。goodとbadに分裂させた対象を統合していくために、愛着関係の再構成が必要であると考えられる。その意味で、母子ともに安心かつ安全を感じられるような現実の母子関係の確立を志向したアプローチが、安定した対象関係の内在化を促進するだろうと推測される。

そして、中学生の不登校事例の特徴から考えられる治療的アプローチの焦点としては、過去に内化されて、すでに作動している歪んだ対象関係の修正と体験を意味付けている自己感の再構成が重要であろう。過去の愛着対象=母親対象と万能的な自己像を捨て去ることを巡る「対象喪失」や「罪悪感」の痛みを認め、耐えられるほどに自我を育てるアプローチが子どもの心の成長への鍵となることが推測される。

最後に、事例7のような発達障害のある子どもの場合や境界線級の知能を持つ子どもが不登校に陥りやすい背景としては、母子間の相互作用の意味付けや対象表象の摂り入れの際に歪みが生じやすく、母子関係の歪み、対象関係の歪みを生じ、不安定になりやすいことも推測されるので、そうした特徴を把握した上で、成長促進的なアプローチを組み立てる必要があると考えられる。

<引用文献・参考文献>

- 1) アン・アルヴァレス (千原雅代, 中川純子, 平井正三 訳) : こころの再生を求めて ポスト・クライン派による子どもの心理療法, 岩崎学術出版社, 2002 (Anne Alvarez, Live Company: Psychoanalytic Psychotherapy with Autistic, Borderline, Deprived and Abused Children, Routledge, 1992)
- 2) J・ボウルビイ : 母子関係の理論 新版 I 愛着行動, 岩崎学術出版社, 1976

- 3) J・ボウルビイ : 母子関係の理論 新版 II 分離不安, 岩崎学術出版社, 1977
- 4) M.Klein (西園昌久 牛島定信訳) : 子どもの心的発達, 誠信書房, 1983
- 5) 松木邦裕 : 対象関係論を学ぶ, 岩崎学術出版社, 1996
- 6) 松木邦裕 : 私説対象関係論的心理療法入門 精神分析的アプローチのすすめ, 金剛出版, 2005
- 7) 齊藤万比古 : 「慢性疾患、心身症、情緒及び行動の障害を伴う不登校経験のある子どもの教育支援に関するガイドブック」, 国立特殊教育総合研究所, 2006 (国立特殊教育総合研究所課題別研究「慢性疾患児の自己管理支援のための教育的対応に関する研究報告書」第2章 pp.19-30)
- 8) H. スィーガル (岩崎徹也訳) : メラニー・クライン入門, 岩崎学術出版社, 1977
- 9) S・スペンスリー (井原成男他訳 木部則雄解題) : タスティン入門 自閉症の精神分析的探求, 岩崎学術出版社, 2003 (Sheila Spesley, Frances Tustin, Routledge, 1995)
- 10) D.N.Stern (小此木啓吾 丸田俊彦監訳) : 乳児の対人世界 理論編, 岩崎学術出版社, 1989
- 11) D.N.Stern (小此木啓吾 丸田俊彦監訳) : 乳児の対人世界 臨床編, 岩崎学術出版社, 1991
- 12) D.N.Stern (馬場禮子 青木紀久代訳) : 親-乳幼児心理療法 母性のコンステレーション, 岩崎学術出版社, 2000
- 13) フランセス・タスティン (齊藤久美子 平井正三 辻井正次 他訳) : 自閉症と小児精神病, 創元社, 2005 (Frances Tustin, AUTISM AND CHILDFOOD PSYCHOSIS, Hogarth, 1972)
- 14) 植木田潤 : 障害のある子どものこころの成長・発達—遊戯療法事例にみられる相談担当者との関係性を軸に一, 国立特殊教育総合研究所 教育相談年報第26号, 2005
- 15) D.W.Winnicott (牛島定信訳) : 情緒発達の精神分析理論, 岩崎学術出版社, 1977

